

花 き

実 況

1 キ ク

奥越の秋植え夏ギクは、平地の畦の一部に積雪がみられる状態であり、和泉等の山間部では1mを超える積雪がある。春植えギクでは親株育苗ハウスで採穂が3月25日前後に行われた。

あわら市では無加温ハウスで採穂、挿し芽が行われている。一部のハウスでは、6月咲きにトンネル被覆による促成栽培が行われている。

福井の平坦部では、春植え8月咲きギクの定植が4月上旬に行われる。今年の3月は寒暖の差が大きいものの、生育は順調である。アブラムシの発生が早いものの、一部の圃場では白さび病が微発である。

丹生の春植えの品種は「はじめ」「小雨」「小鈴」「翁丸」「花絵」「恋心」であり、昨年と同様に12月上旬から畝を作りマルチ被覆を行っており、1.0haに作付予定である。挿し芽は3月15日から開始して、4月中旬ぐらいまで順次行われる。2月の天候の影響で品種によって芽立ちに差が出ているが、概ね生育良好である。白さび病が微発である。

二州、若狭地区では3月下旬から挿し芽を開始し、4月15日頃の定植を予定している。

2 ユ リ

LAユリの県育成品種「福井ユリ」は、福井市、春江、鯖江で季咲き栽培が約5,000球程度作付けされている。

春江では、3月13～20日にかけて、「リッチモンド」「ランデーニ」「ベルメール」「ブラックアウト」等の球根が定植された。福井ユリ「レッド」は45cm、43枚で花芽が形成されており、5月下旬開花の見込み。あわらの「レッド」はやや短く30～40cmで、開花期は6月上旬の見込み。

永平寺では、3月17日調査で冷蔵処理されたレッドが生育に差があり、草丈30～60cm(60cm)となっている(昨年3月17日調査)。

福井市脇三ヶ町では、3月17日調査で据置した「レッド」が7cm(5cm)であった(昨年3月18日調査)。

鯖江の12月上旬に定植された「福井ユリ」の3月18日調査では、冷蔵処理をしていないため昨年に比べ萌芽が遅く、レッドの草丈が3cm(昨年同時期5cm)であった。

3 トルコギキョウ

あわらの「レイナホワイト」「ボンボヤージュ」の2度きり栽培が行われているが、新芽の勢いがまだない。生育開花がやや遅れる見込み。

南越地区では、3月18日調査で「アクロポリス」「ロジーナ」「北斗星」が9月中旬播種、11月上旬定植の作型で草丈8～12cm、本葉5～6対(6～7対)である(昨年3月14日調査)。

二州では敦賀市で、12月上旬播種の作型が4月上旬に定植予定である。

若狭では3月上旬から播種されている。

4 ストック

坂井北部丘陵地は、一戸のみ3月下旬まで出荷が続く見込みである。2月～3月出荷物は茎割れが目立つ。品種間差があり「アプリコット」でやや多い。

南越地区では、9月上中旬定植の「カルテット」シリーズが3月18日調査で草丈90cmと昨年同様、2月上旬から3月上旬まで出荷された。(昨年3月14日調査)。

若狭では、3月19日調査でアイアンシリーズはホワイトが収穫始め、カルテットシリーズは一部開花し始めている。

5 その他

福井北部のヒマワリ「サンリッチパイン 45」「サンリッチオレンジ」は3月下旬に播種されている。

春江のフリージア「エレガンス」は草丈60～70cmで、3月下旬より開花はじめ。

対 策

1 キクのハモグリバエ類とカブラヤガの防除

- (1) ナモグリバエは4～5月にキクの暮れ植え栽培の株や、葉肉の厚い品種に発生するため、薬剤防除を予防的に行なう。例年被害が目立つ品種は、オルトラン粒剤（ハモグリバエ類に登録有）、スタークル粒剤（マメハモグリバエに登録有）等を用いて、前もって防除しておく。
- (2) 5月まではナモグリバエ、6月以降にマメハモグリバエが発生し優占種が変わるため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。特に本年は生育初期に不順な天候であったため、ナモグリバエの発生が多い可能性がある。浸透移行性のあるダントツ水溶剤（ナモグリバエ登録有）、アクタラ顆粒水溶剤（ハモグリバエ類）、ジェイエース水溶剤（マメハモグリバエ）を組み合わせる。
- (3) ハモグリバエ類の幼虫が入った葉は二次発生と黒斑病の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。被害がひどい場合は、落とした下葉も圃場から除去する。
- (4) 新芽が食害により倒れる場合はカブラヤガの存在が疑われる。捕殺するかカルホス微粒剤Fを地際に処理する。基本的に接触毒であるため、植物の株元処理が有効である。

表1 品種がカブラヤガ類の食害に及ぼす影響

品種名	草丈 (cm)	食害芽数/調査芽数			平均食害 芽率(%)
		①	②	③	
白霧	19.3	6/182	6/141	3/131	3.3
星の輝き	15.2	0/94	2/141	2/105	1.1
いそべ	14.8	10/128	8/110	13/126	8.4
むつみ	15.2	2/125	3/145	1/145	1.5
釣舟	-	12/102	18/112	-	14.0
とび丸	12.5	1/161	3/141	2/165	1.3
精しまなみ	13.3	6/120	3/125	15/125	6.5
春やまと	8.6	4/72	2/56	3/48	5.2
はなこ	13.6	8/115	2/126	5/131	4.1
織姫	-	7/168	4/152	4/158	3.1
うきぐも	9.8	5/102	6/153	7/74	6.1
玉姫	12.5	8/141	12/145	14/125	8.4

調査日:2014年4月30日、調査圃場:大野市松丸、不織布被覆あり

2 トルコギキョウの管理

- (1) 定植後は、活着と初期生育を促進させるため、根が張るまで十分に灌水する。特に、花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対（草丈が15～20cm）頃までは水分や肥料を十分に与える。二度切り栽培は、草丈が10～20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。多く枝を残すと、花のボリュームが出ない上、ネットと枝が邪魔で収穫がしにくい。
- 上葉が小さくなるうらごけがみられる場合は、圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施肥する。葉先枯れが出やすい品種はカルシウム入り液肥の葉面散布を行うとよい。
- (2) 春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥（OKF-1の500～1000倍など）を中心に追肥する。
- (3) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度（最適EC0.3～0.5mS）が1.0mS/cm以上と高い場合に障害発生する可能性があるため、圃場準備の

際には土壌分析を行い、施肥量を調節する。また、ECの値が高い場合は、定植前に水をかけ流したり、床の表土を削り落とし、塩類を除去する。

- (4) 土壌酸度が低い時も、同様な障害が発生する。pHは6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。1㎡あたり深さ10cmの土壌のpHを1上げるのに必要な石灰資材は粘質土で120g、砂質土で80gとされる。そこで、対策としては薄い石灰水（消石灰などの石灰資材を100g/水10ℓに溶かす）10ℓを3㎡に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (5) 立枯病は、フザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は、灰白色粉状のかびが密生する。耕種的防除として過湿を防ぎ丈夫に育て、発病株は、抜き取り焼却する。
- (6) 葉先枯れ対策には、日中の換気を十分に行い、軟弱徒長にならないように管理する。雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいため、雨や曇天の日は扇風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、ハウスサイドの降雨による雨滴で灰色かび病や立枯れの発生を助長するので注意する。

3 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅90cmの50m畝で約2500～3000本の苗が必要なので種子量は5ℓ（約4000粒）播く。催芽処理として、播種前に種子をガーゼで包み、水に浸漬して48時間冷蔵庫に入れる。水が腐らないようにするため、24時間後に水を替える。
- (2) 200穴のセルトレイに播種する。種子は横向きに並べ、種子が隠れる程度に覆土する。覆土後は新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20℃以上（発芽適温26℃）を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育にも影響する。放射冷却で低温になる時は不織布をベタガケする。
- (4) 3～4日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に、子葉についている種皮が取れないようであれば手で取り除く。
- (5) 若苗定植が原則なので、最初の本葉が展開した頃（播種10日後）に遅れないよう定植する。
- (6) 4月下旬に播種したら、早生品種は6月中旬に開花する。「サマーサンリッチパイン」「マンゴー」「オレンジ」の順番に早く開花する。

4 スイセンの春以降の管理

- (1) コンテナ栽培のスイセンはハウスの外に出し、朝日が当り、夕日が当たらない半日日陰の場所に移す。ハウス栽培のスイセンは気温が20℃程度に管理できるように、日中はハウスを開放し、夜は保温のため閉めるように温度管理を行う。できるだけ葉を成長させて、切り下球の肥大を図る。ハウス内が直射日光で熱くなる場合は寒冷紗等で遮光し、ハウス内室温をできるだけ下げる。灌水は適宜行い、土壌が湿っているように管理する。極端な乾湿は避ける。
- (2) 養成中のスイセンは球根を肥大させるため、3月に施用してない場合は4月上旬までにそさい5号を10a当たり40kg施用する（窒素成分量6kg/10a）。
- (3) 灰色かび病等発生が見られる株があるときは、ゲッター水和剤1000倍液で防除する。
- (4) 5月下旬までは十分に光合成をさせて、球根の肥大を促進する。
- (5) 6月上旬ぐらいに地上部が3分の2程度枯れたら、掘り上げ準備を行う。その時に残った茎をつけたまま掘り上げ、風通しの良い日陰で乾燥させる。